

D 国語問題

注意

- 一 試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
- 二 解答用紙はすべてHBの黒鉛筆またはHBの黒のシャープペンシルで記入することになっています。HBの黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。
(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
- 三 この問題冊子は16ページまでとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。なお、問題番号は一〜三となっています。
- 四 解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に氏名のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。
- 五 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
- 六 解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷つけたりしないように注意してください。
- 七 この問題冊子は持ち帰ってください。

マーク・センス法についての注意

マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。

- 一 マークは、左記の記入例のようにHBの黒鉛筆で枠の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。
- 二 一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。
- 三 訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しすぎはきれいに取り除いてください。

マーク例

①
0 1
0 2
● 3
0 4
0 5

(3と解答する場合)

— 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

都市には山積する問題がある。次々と生まれ変わる都市装置と住民のニーズが生みだした風俗は、あまりに多彩で、その全体を見ることは私にはとうていできない。都市にはビジネスセンターの外側に広大な商業地があり、そのあいだに中流の高層住宅群が雑居し、そのさらに外周に港湾や工場群や倉庫群がならび、高級住宅地や低家賃住宅群はそれぞれのステータスを示す高低の環境をえらんでひろがっている。そこには現代の差別や機能による「住みわけ」の法則が生きているし、都市はそれら全体で現代の社会生活の縮図を提供している。

私はここではそうした都市の各部位に生きるすべての市民が、さまざまな欲求を持つて集散する一つの場所、つまり「盛り場」という空間をとりあげて、現代の世相の一端を解説してみたい。盛り場は都市における恒常的なハレの場である。日本の代表的な都市東京を例にとってみれば、明治・大正の主な盛り場は、第一に都心の銀座であった。ついで下町の庶民の(1)カンラクの地浅草であった。現在ではそれが新宿、原宿、六本木や渋谷へ移行している。

(1) この変化のなかに私は昭和三〇年以降の都市の膨脹の指向性と都市民俗のあり方の一つを認めることができると思う。

高度経済成長にともなうモータリゼーションの徹底は、街路から人や文化を追放してしまった。昭和四〇年代は自動車街路を占領した時代である。銀座や新宿のメインストリートが盛り場としての機能をそこなわれたのもこのためで、人びとは裏通りへ横丁へと難を避けた。もともと街路こそ都市の都市らしさを象徴するもの、都市空間の中核だったのである。

車の洪水による排気ガスの公害、光化学スモッグの激発は、人びとを市民運動に立ち上がらせ、街路を人間の手にとり戻そうとの世論をうみだした。これは本来の街路のもつ社交性や文化的活性の恢復を希求するものであった。

最初に歩行者天国をあるいた日（一九七〇年八月）、人びとは、これまでよそよそしかった銀座や新宿などの街並みが急に身近なもの、新鮮なものに見えたことを記憶しているであろう。人びとは道のあまりの広さに当惑し、右往左往しながら両側に建ちならぶ大きな建物をふり仰いだりした。そのうち、道の中央にベンチがおかれ、露店がならび、呼びこみや大道芸もあらわれたりして、人びとは小さな祭り気分を味わう。私たちはあらためて、祭りが都市をよみがえらせる更新機能を持つていたことを思い知った。だが、日曜の夕刻をすぎれば、再び街路は車の洪水となり、喧騒と煤煙におおわれてしまう。これでは常設の「市」としての盛り場のにぎわいを保持することはできない。原宿や六本木や渋谷の公園通りなどが新しい盛り場として浮上してきたのは、それらが現代都市の魅力あるファッションを演出するに必要な、多くの好条件を備えていたからである。

軽い坂のある多くの曲りくねった小道（坂は歩行者同士をたがいにじっくり眺めさせる効用があり、ここからファッションが生まれ、みがかれる）。大勢の人が一か所にたまることなく自由に流れられるような横路や、それを結ぶ街路樹のあるメインストリートの存在。そして町の核となりうるような個性的で記念碑的な建物の所在、それに洗練された商店街の形成。そうした要素を一つのもまとまった街づくりに活性化しようとした都市デザイナーや経営者ら、演出家集団の存在。⁽²⁾ そうしたものが新しい盛り場の条件として必要なのである。

「古来……街路自体、つねに偉大な世界劇場であった」^(注2)（B・ルドフスキー）。そこから人生の多くのドラマもコメディも生まれた。フランスの名画「天井桟敷の人びと」^(注3)の舞台も街路ではなかったか。明治・大正期の大道芸は、猿まわしも三河万歳も獅子舞もバナナの叩き売りもすべて街路で演じられた。

日本の都市には西欧や中近東の都市のように特定の広場に市民がつどい、論じあい、楽しむという習慣がない。西欧のような市役所や教会前の広場もない。そうしたがつしりとした建物で囲まれた静止した広場より、開放性が大きく、動きや流れがある細長い空間のほうが日本人の好みにあっているようだ。新宿副都心の高層ビル街が失敗したのはそのためであろう。有名社寺の門前町の光景を想起してみるとよい。祭りの日の縁日の夜店を一軒一軒のぞいて歩いて楽しむという伝統的感覚を無視してはならない。それはそのまま現代都市の盛り場に民俗

の原理として生きている。人びとは見られることを意識し、自慢の服飾をして、のんびりと漫歩し、小さな店へ出たり入ったりしながら、あらゆるバラエティーにふれ、刺激をうけ、見物し、また^(a)カンショウされる。

そこには大道芸人こそ少ないけれど、竹の子族からバンク少年まで出沒し、洗練されたファッションやブティックのきらびやかな店舗群がある。他に露店、星占い、手相見、似顔絵かき、実演販売、宗教説法、ゲーム屋、食べ物屋、スポーツ店、レコード屋、喫茶店、スナック、バー、映画劇場、のぞき部屋などが並んで好奇心をそそる。その群衆のなかを人びとは流れあるく。特別の目的があるのではない。ただ見て歩くこと、それ自体が気ままに楽しいのだ。

原宿や渋谷の公園通りには、若者たちが憧れる最も先端的なファッションやリズムの集積がある。道路、建物、壁面、展示具、並樹、照明灯、広告など、町全体がファッションブルにデザインされ、そこに行くことによつて最新のモードが視覚され、吸収できるようになっている。新しい都市の盛り場は、経営者や演出家たちがねらつたように、それ自身が文化情報的一大装置と化しつつある。そこにはつねに意外性のあるイメージが示され、人びとを魅惑するイベントが組まれていなければならなかつた。盛り場についてのこうした考え方は今では全国の地方都市にもひろがっているように私は思う。

盛り場には日本の古い民俗である祭りがたしかに生きている。都市化は決して祭りや宗教的儀礼を消滅させるものではない。それどころか高度経済成長が一段落したところから、全国のほとんどの町で盛大なお祭り競争がはじまった。古い祭りが復活され、新しい祭りが創造された。その中心の担い手となつたのは、町内会独自の力が弱まつたため商工会や企業で、いちじるしく宗教色は薄れている。だが、それらをテレビが全国ネット・ワークで報道するため、祭りは多くの観光客をあつめて今や空前の繁栄ぶりを示している。ここから何か新しい民俗が生まれるか、私たちのこれからの問題であろう。

ただ、盛り場についていえることは、新しい要素を取り入れなければさびれてゆくということだ。昭和三〇年代からの巨大な生活革命にともなう a は都市の顔をめまぐるしく変えさせたからである。そのため、都市

の諸装置は「スクラップ・アンド・ビルド」を非情なまでに要求される。現代の都市は「新宿」に代表されるように、まるで生きているアミーバのように変容し、増殖している。この活力、この消費者市民と商工業者との間のエネルギーのぶつかりあいこそが、新しい街のハレの気分を更新してきた。こうした相互転換する受け手と送り手とのダイナミズムを失っている町は衰退する。

盛り場は祭りが恒常化したもの、ハレの興奮をここで味わい、生命力の賦活(a)を感じて帰る。盛り場をそうした機能をもつ四次元の劇場（路上ステージ）として捉えてみると、いろいろなことが分かってくる。大都市の市民は日常生活での管理や約束ごとや組織の拘束のわずらわしさから逃れたいと思っている。自我を溶解すべき共同体を失い、産土(うぶすま)の安息の地から断たれ、家庭崩壊におびえている現代の都市民は、帰属地を喪った漂流民のような言いようのない孤独と根源的な不安を抱えている。その彼らが職場や家庭から離れて盛り場の群衆の中にまぎれこむとき、匿名性の存在に変身した気軽さに自由と解放感を味わうことができるのである。

このとき彼らは完全に都市の漂流者となり、無名者の一人になる。しかも、わずかの金さえ持っていれば、人びとはどこにでも自由に出入りでき、名を問われることなく、身分をこえて「お客様」のあつかいを受ける。都市は市民を疎外しておきながら、また、別のところでこのように無名者として抱擁する。盛り場では見る者が見られるのたぐいで、人びとは化粧（化身）をし、また他者にたいして演者となる。⁽³⁾ここでは相互行為が暗黙の交流を生み、一種独特の無言の連帯ムードをつくりだしている。盛り場はそれゆえに大胆なアクター（演者）を許容し、歓迎する。

都市漂流民はこの盛り場で、家庭や職場では求められない慰藉(b)と快楽の匂いをかぐ。軍艦マーチの鳴るパチンコ屋、一瞬の未来の夢を描いてくれる占い師、コンピュータゲーム、そしてさまざまなイメージを喚起する世界中の華美な商品をおく店々、それに和洋華何でもある食べ物屋、エロチシズムの発散できる怪しげなバー等々、盛り場は消費の最前線であり、ファッションの展示場であり、孤独な演者たちを慰藉する劇場でもある。ここで生まれる風俗がマスメディアによって増幅され、日本の都市文化の **b** を促しているのである。

(注) 1 現代——この文章は一九八六年に発表された。したがって文章中の現代や現在も、その少し前あたりの時期を指していると考えられる。

2 B・ルドフスキー——オーストリア生まれの建築家兼著述家。フィールドワークの実践家として知られる。

3 「天井桟敷の人びと」——一九四五年製作のフランス映画。

4 竹の子族からパンク少年——いずれも当時流行の奇抜なファッションを身にまとった若者たちを指す語。

問

(A) 線部(イ)・(ロ)を漢字に改めよ。(ただし、楷書^{かいしよ}で記すこと)

(B) 線部(a)・(b)の読みを、平仮名・現代仮名遣いで記せ。

(C) 線部(1)について。「この変化のなかに」認めることができる「都市民俗のあり方の一つ」の説明として、左記各項のうち、ふさわしいものを1、ふさわしくないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 社寺の門前町の縁日をのぞき歩く感覚が再現されている。

ロ 日本の古い民俗である祭りが新旧入り混じって存在している。

ハ 消費者市民と商工業者との間のエネルギーのぶつかりあいが見られる。

ニ 都市が生きているアミーバのように変容し続けている。

ホ 現代都市の魅力あるファッションが演出されている。

(D) 線部(2)について。この部分に関わる説明として、左記各項のうち、ふさわしいものを1、ふさわしくないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 限られた時間帯を過ぎれば日常気分が復活してしまうようでは盛り場とは言えない。

ロ 有名社寺も町の核となる個性的で記念碑的な建物の資格がある。

ハ 街の演出家と言った時には、都市デザイナーだけでなく、経営者や商工業者も含まれる。

ニ 西欧や中近東の都市の特定の広場のような場所も、ここで言う新しい盛り場に含まれる。

ホ 新しい盛り場は文化情報の一大装置となつて、イメージやイベントを提供する。

(E) 空欄 a にはどのような表現を補つたらよいか。最も適当な一続きの部分を本文中から抜き出し、句読点とも五字以上十字以内で記せ。

(F) —— 線部(3)について。この部分に関わる説明として、左記各項のうち、ふさわしいものを1、ふさわしくないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ ここでの相互行為の主体は、職場や家庭から解放された人々である。

ロ 疎外と抱擁という都市の相反する二つの態度が、ここでの連帯ムードには欠かせない。

ハ 漂泊者たちは盛り場で交流し、職場や家庭とは別の人間関係を構築し、助け合う。

ニ 盛り場では見たり見られたりの関係が成り立つために、人は化粧をしたり化身したりする。

ホ 盛り場においてはアクター(演者)が大胆であると、交流や連帯は盛り上がる。

(G) 空欄 b にはどのような言葉を補つたらよいか。左記各項の中から最も適当なもの二つを選び、番号で答えよ。

1 均質化 2 多様化 3 拡散化 4 求心化 5 二元化

(H) 本文中の「街路」をめぐる説明として、左記各項のうち、ふさわしいものを1、ふさわしくないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 裏通りや横丁はメインストリートと違って、盛り場としての機能を担っていない。

ロ 街路が本来持つ社交性や文化的活性を求めて歩行者天国は誕生した。

- ハ 小道や横路はメインストリートなどと連携して一つのまとまった街を形成する。
 - ニ 動きや流れのある細長い空間と広場は一体となって市民に提供される。
 - ホ 路上ステージという劇場では、市民も自由に即興芝居に参加できる。
- (I) 「盛り場」と「祭り」の共通点と相違点について、句読点とも三十字以内で説明せよ。

二 左の文章を読んで後の設問に答えよ。ただし、設問の関係で返り点、送り仮名を省いたところがある。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

人^ハ無^シ毛羽、不^レ衣^キ則^チ不^レ犯^サ寒^ヲ上^ハ不^レ属^セ天^ニ而^シ下^ハ不^レ著^ク地^ニ以^テ腸胃^ヲ為^ス根^本不^レ食^ヲ則^チ不^レ能^ク活^ク是^ヲ以^テ不^レ免^ル於^テ欲^{スル}利^ヲ之^ノ心^{ヨリ}欲^{スル}利^ヲ之^ノ心^{ヨリ}不^レ除^{カレ}其^ノ身^ノ之^ノ憂^ハ也^ニ故^ニ聖^人衣^ハ足^リ以^テ犯^ス寒^ヲ食^ハ足^リ以^テ充^ツ虚^ヲ則^チ不^レ憂^ハ矣^ニ衆^人則^チ不^レ然^ラ大^ハ為^リ諸^侯小^ハ余^ス二^ニ千^金之^ノ資^ヲ其^ノ欲^{スル}得^ル之^ノ憂^ハ不^レ除^{カレ}也^ニ胥^靡有^リ免^ル死^罪時^ニ活^ク今^ニ不^レ知^ラ足^ル者^ノ之^ノ憂^ハ終^身不^レ□^ニ故^ニ曰^ク

(「韓非子」による)

(注) 1 胥靡——徒刑者。囚人。

問

(A) 線部(1)の「犯」の解釈として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 苦悶
- 2 甘受
- 3 麥容
- 4 容認
- 5 克服

(B) 線部(2)の解釈として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 未熟でまだ地に足がついておらず
- 2 地下に潜って住むことはできず
- 3 身分の低い者は豊かな生活ができず
- 4 力のない者は天下を支配できず
- 5 植物のように地に根をおろしておらず

(C) 線部(3)の読みを平仮名・現代仮名遣いで記せ。

(D) 線部(4)について、左記各項のうち、その内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

- イ 多くの人々は憂いから自由になることはない。
- ロ 多くの人々は成功して地位を得たとしても満足できない。
- ハ 多くの人々は毛や羽が無くても気候に順応できる。
- ニ 多くの人々は罪を犯しても許されることがある。
- ホ 多くの人々は空腹が満たされれば幸福を感じる。
- ヘ 多くの人々は財産を得ても満足できない。

(E) 空欄□にはどのような語を補ったらよいか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

- 1 笑
- 2 施
- 3 解
- 4 始
- 5 遊

(F) ——— 線部(5)の書き下しと解釈の組合せとして最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 「書き下し」禍は足るを知らざるより大なるは莫し。

「解釈」満足することを知らないことよりも大きい災禍はない。

2 「書き下し」禍は足るを知らざることには於いて大なるは莫し。

「解釈」災禍に満ちた世の中のことには、考えないのが一番よい。

3 「書き下し」禍の大なること莫ければ足るを知らず。

「解釈」大きな災禍を経験しなければ、満足は得られない。

4 「書き下し」禍大なれば足るを知らざる莫し。

「解釈」災禍が大きければ、かえって真の満足が得られる。

5 「書き下し」禍莫きは足るを知らざるより大なり。

「解釈」いま災禍が起らないのは、将来満足を得るよりも大事である。

三 左の文章は、光源氏が久しぶりに明石の君（女君）のもとを訪れた翌朝の、別れの場面である。明石の君は郷里の明石から、光源氏とのあいだに生まれた幼い姫君（若君）とともに、嵯峨野にある光源氏の別荘（桂の院）の近くに居を移していたのであった。これを読んで、後の設問に答えよ。（解答はすべて解答用紙に書くこと）

またの日は京へ帰らせたまふべければ、すこし大殿籠り過ぐして、やがてこれより出でたまふべきを、桂の院に人びと多く参り集ひて、^(注2)ここにも殿上人あまた参りたり。御装束などしたまひて、⁽¹⁾（源氏）「いとほしたなきわぎかな。かく見あらはさるべき限にもあらぬを」とて、騒がしきに引かれて出でたまふ。心苦しければ、さりげなく紛らはして立ちとまりたまへる戸口に、⁽⁴⁾乳母、若君抱きてさし出でたり。あはれなる御気色にかき撫でたまひて、⁽²⁾（源氏）「見ではいと苦しかりぬべきこそいとうちつけなれ。いかがすべき。いと里遠しや」とのたまへば、⁽³⁾（乳母）「はるかに思ひたまへ絶えたりつる年ごろよりも、今からの御もてなしのおぼつかなうはべらむは心づくしに」など聞こゆ。若君手をさし出でて、立ちたまへるを慕ひたまへば、⁽⁹⁾ついでにたまひて、⁽⁶⁾（源氏）「あやしう、もの思ひ絶えぬ身にこそありけれ。」^(b)しばしにても苦しや。⁽⁴⁾いづら。などもろともに出でては惜しみたまはぬ。さらばこそ人心地もせめ」とのたまへば、⁽⁵⁾うち笑ひて、女君にかくなむと聞こゆ。⁽²⁾なかなかもの思ひ乱れて、臥したれば、⁽⁵⁾とみにしも動かれず。あまり上衆めかしと思したり。人びともかたはらいたがれば、⁽⁶⁾しぶしぶにゑざり出でて、几帳にはた隠れたるかたはら目、^(c)いみじうなまめいてよしあり。たをやぎたるけはひ、⁽⁶⁾皇女たちと言はむにも足りぬべし。⁽⁸⁾帷子ひきやりて、こまやかに語らひたまふとて、^(d)とばかりかへり見たまへるに、⁽⁷⁾さこそしづめつれ、見送りきこゆ。⁽⁸⁾言はむかたなきさかりの御容貌なり。いたうそびやぎたまへりしが、^(d)すこしなりあふほどになりたまひにける御姿など、⁽⁹⁾かくてこそものものしかりけれど、御指貫の裾まで、なまめかしう愛敬のこぼれ出づるぞ、^(e)あながちなる見なしなるべき。

〔源氏物語〕による

(注)

- 1 これ——明石の君の住まいを指す。
- 2 ここ——明石の君の住まいを指す。
- 3 隈——隠れ場所のこと。
- 4 うちつけなれ——調子がよすぎるだろうが、の意。
- 5 里遠しや——「里遠みいかにせよとかかくのみはしばしも見ねば恋しかるらむ」(元真集)による。
- 6 いづら——さあ、の意。明石の君への呼びかけ。
- 7 さかりの御容貌——光源氏の美貌を表す。
- 8 すこしなりあふほどに——少し恰幅かぶくがよくなった感じで、の意。

問

(A)——線部(1)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 くつろいでいる時間
- 2 礼儀しらずな行動
- 3 にぎやかな出迎え
- 4 きまりがわるい事態
- 5 目だちすぎる装い

(B)——線部(2)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 光源氏が若君に会えなければ
- 2 明石の君が光源氏に会えなければ
- 3 明石の君が若君に会えなければ
- 4 若君が明石の君に会えなければ
- 5 光源氏が乳母に会えなければ

(C)——線部(3)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 離れているうちに明石の君のことを忘れてしまった

- 2 できるだけ早く若君を引き取ることを望んでいた
- 3 遠くにいたので光源氏に期待するのを諦めていた

- 4 いつのまにか若君を手放そうという気になっていた

- 5 いつの日か明石の君と光源氏が結婚するのを願っていた

(D) 線部(4)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 すこし離れているだけでも
- 2 たまに遠出をしてみても

- 3 仮のこの世であるとしても
- 4 つねに出家を願っていても

- 5 いずれ別々に暮らすとしても

(E) 線部(5)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 ひたすら顔を伏せている
- 2 びくりとも動かないでいる

- 3 なにも用意せずにいる
- 4 まったく心を動かさずにいる

- 5 すぐに起き出せないでいる

(F) 線部(6)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 皇女というには気品が欠けるだろう
- 2 皇女といっても通じるだろう

- 3 皇女と会うことはできないだろう
- 4 皇女のよい話し相手になるだろう

- 5 皇女の侍女にふさわしいだろう

(G) 線部(7)の具体的な内容として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 光源氏に頼みごとをしなかったこと
- 2 光源氏の言葉を信じなかったこと

- 3 光源氏との別れを覚悟したこと
- 4 光源氏に若君を預けようと決めたこと

- 5 光源氏への心をおさえていたこと

(H) 線部(8)の現代語訳を八字以内で記せ。

(I) ——— 線部(9)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 光源氏の見栄というものだろう

2 光源氏の見間違えというものだろう

3 光源氏の人徳というものだろう

4 女君のひいき目というものだろう

5 女君のひがみというものだろう

(J) ——— 線部(a)と(e)のうち、——— 線部(i)と同じ助動詞を一つ選び、記号で答えよ。

(K) ——— 線部(ロ)は誰の動作・行為か。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

1 光源氏

2 女君

3 若君

4 殿上人

5 乳母

(L) ——— 線部(甲)・(乙)は、それぞれ誰に対する敬意を表すか。左記各項の中から最も適当なものを一つずつ選び、番号で答えよ。ただし、同じ番号を二度用いてもよい。

1 光源氏

2 女君

3 若君

4 殿上人

5 乳母